

## NDYS 参加報告

～神戸の震災復興問題点を世界と共有する～

甲南高等学校・中学校 中原 敦

高校2年生の総合学習で、阪神淡路大震災の復興について一連の授業やフィールドワークを実施した。1学期間の成果をまとめ、8月に新潟で行われたNDYSで“After 21 years of the Great Hanshin-Awaji Earthquake～its recovery and problems～”という英語プレゼンテーションを行った。

### 1. はじめに～学校での実践～

本校では、2015年度より、Global Study Program (3か月～1年の留学を義務付ける、グローバル人材養成プログラム、以下GSPと略)の総合学習のテーマに、「防災・災害復興」を掲げている。理由は、全世界的課題を解決することを目指す課題研究としてふさわしいこと、また、1995年の阪神淡路大震災を経験し、人や街から直接体験を通じて学ぶことができることである。

授業開きで「防災ゲーム」を行った。大震災という非常時に起きる、様々な状況で明確な答えのない問いにどうこたえるか(全員分の食料がない場合、それを配るべきか否か、等)を議論することができる。

大震災後に再開されたHAT Kobeにある、「人と防災未来センター」を訪問し、大災害の実相を少しでも身近に体験させた。

グループ別フィールドワークを3か所で行った。1)再開された問題の多かった新長田商店街を歩き、店主から当時の様子や、復興過程、現在の問題点を聞いた。



写真1 新商店街でうなぎ屋店主から話を聞く

2)灘神戸生協とネスレ日本を訪れ、当時の活動や、現在の被災地支援について話を伺った。

6月の東北修学旅行で、GSPは1日宮古市田老地区を訪れた。「万里の長城」と呼ばれた防潮堤に守られていたにもかかわらず多くの死者をだしたのはなぜか、防潮堤の上で語り部ガイドに話を聞いた。また、震災遺構の「田老観光ホテル」で松本社長から、津波襲来時の生々しい話を、社長収録のビデオを見ながら伺った。

### 2. 英語プレゼン準備

1で述べたような学習をまとめて、世界の若者に発表しようと呼び掛けたところ、4名の生徒が応じてくれた。夏休みの3日間を使って、英語でプレゼンテーション用のパワーポイントと、展示発表用のポスターを作成させた。

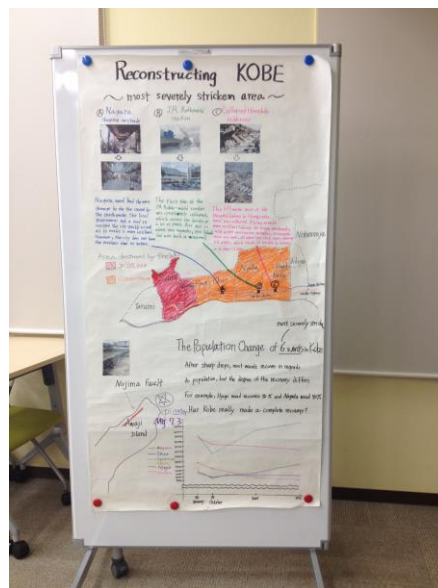


写真2 発表用ポスター

### 3. 新潟での体験 NDYS

大会二日目にプレゼンテーションは行われた。レベルの高い発表が多かった。特に中国の小学校の発表では、英語力と、コンピューターグラフィックスを用いた IT 能力の高さが顕著で、教育の質の高さがうかがわれた。

本校の発表は、練習を重ねたこともあり、恥ずかしくはない程度のものでしたのではないかと思っている。

発表では、阪神淡路大震災 21 年後の問題点を二つ指摘した。一つは、余りにも野心的な復興計画を作ってしまった新長田商店街について、現地フィールドワークと調べ学習から学んだことを伝えた。もう一つは、住宅再建の問題点である。特に最終的に復興住宅に高齢者が集まり、今も孤独死の問題が続いていることを指摘し、見守り活動に参加した様子も紹介した。さらに修学旅行で訪れた田老地区の体験も伝えることができた。最後に、神戸の復興過程から学んだことを、現在進行形の復興、これからの災害復興に生かしていくべきだと結んだ。



写真3 発表の様子

プレゼンテーション以外にも、実にさまざまな素敵な体験をすることができた。ポスター発表、新潟宣言作り、琴リニック、豪華食事つきのカルチャーナイト、浴衣での盆踊り、花火大会など、様々な活動に世界各国から集まった同年代の若者たちと参加でき、英語でコミュニケーションをとることの楽しさを経験し、積極的に動くことの大切さを知った。

### 4. 参加生徒感想

阪神淡路大震災について、事前に調べたり、フィールドワークでの経験を活かして発表できたので、内容に関してはいいものが作れたと思います。その後は誕生日ごとに分かれて、いろんな国の人と英語で話しました。英語が全く通じなくて、ダメかと思いましたが何とか、コミュニケーションを取ることができました。ここで感じたのは、自分の英語がまだまだだということと、英語で人に自分の言いたい事を伝えるということの重要性、難しさを実感しました。その後私は宣言文づくりに参加しましたが、後から訳して考えてみると、とても味があることを言ったんだと思いました。

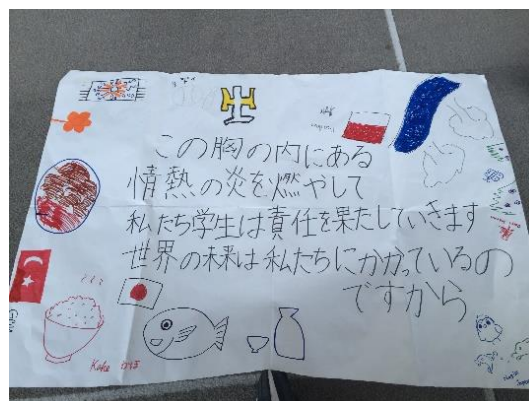


写真4 グループで作成した日本語の新潟宣言

### 5. 成果と課題

生徒4名と参加して、自分自身も生徒たちも学ぶことが多くあり、成長の機会となったと感じている。教師として、海外生徒たちの高い英語と ICT 能力を目のあたりにして、日本の教育の改善のスピードを加速させる必要を強く感じた。

生徒たちは、海外の積極的でレベルの高い生徒たちと6日間を共に過ごして、随分と刺激を受けた。英語で何とかコミュニケーションができて自信をつけた部分があると同時に、自分たちの知識のなさや幼さに気づかされたところも多かった。2 学期以降の参加生徒たちの様子を見てみると、学習面でも、物事への取り組みへの面でもかなり良い方向へ変わってくれた。